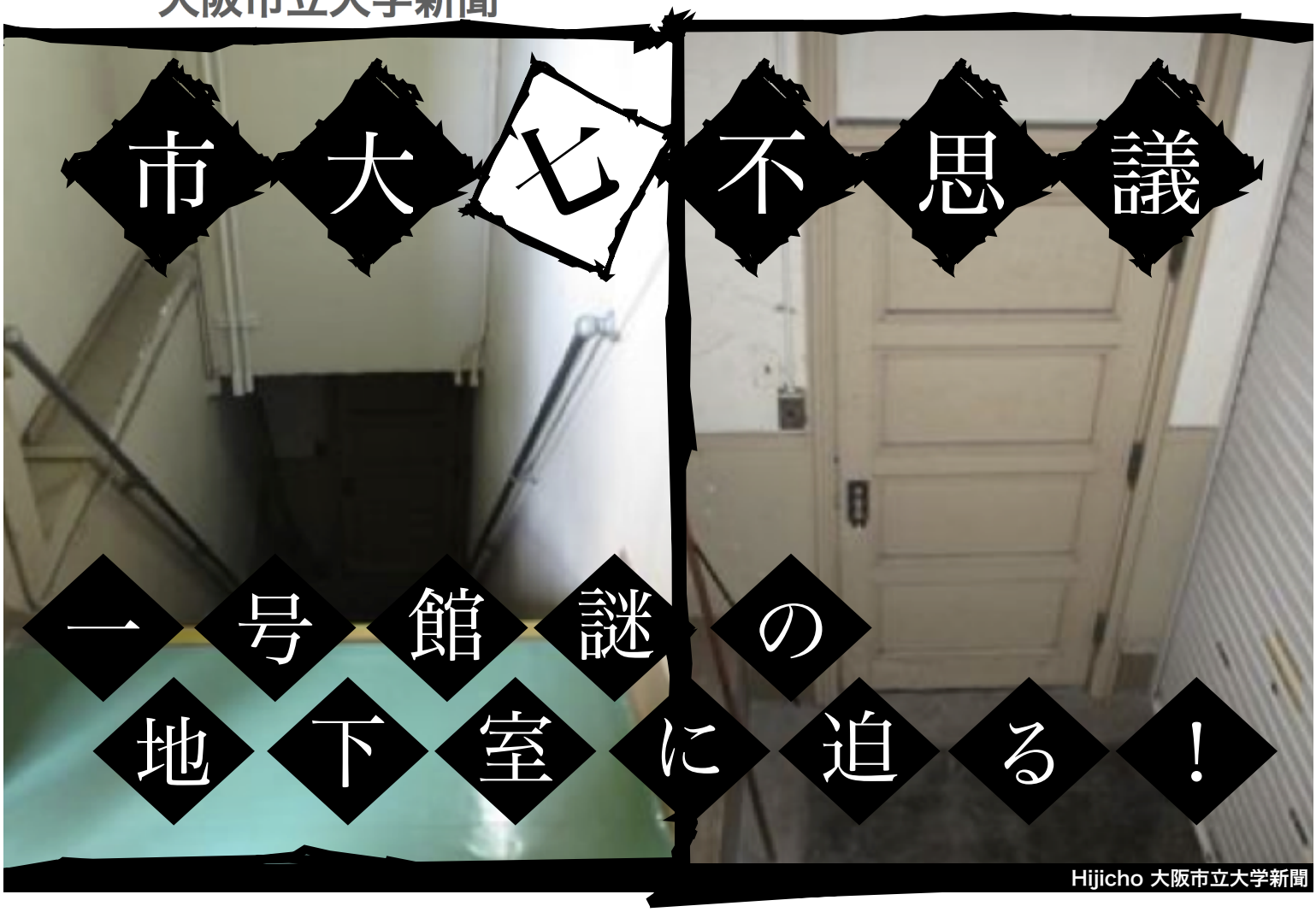
Hijicho
大阪市立大学新聞

2013.7.1
第20号



０４面 授業の枠を飛び出した、実践的な学びを ~キューズモールのイベントを自分たちの手で~

ニュース
会いに来てくれるアイドル! 市大アイドル(仮)
新メンバーデビュー! ▶02面
住吉・住之江・西成3区役所と市大の
連携協定調印式 ▶10面

コラム
コラム日本vol.4 日本国憲法と大学の自治、
そして市大 ~変革期の市大生~ ▶08面
飛辞書 「善意」と「悪意」 ▶11面

その他
choっとカフェログ vol.6 夏カフェ
ハワイアンなくつろぎ空間 Peek a Boo ▶03面
おトイレミシュラン☆
第２弾 －１号館地区編－ ▶06面
市大七不思議~The 7 Wonders of OCU ~
第一回 一号館地下室 ▶12面

Hijichoは、大阪市立大学新聞の発行のみならず、ニュースサイト「Hijicho Web」(http://hijicho.com) も運営しています。Hijicho Webでは、記事を随時更新しているので、リアルタイムな情報を得ることが可能です。皆さん、ぜひとも「Hijicho Web」もあわせてご利用ください。

Hijicho 大阪市立大学新聞 第20号 2013年7月1日, 大阪市立大学 メディア団体 Hijicho 発行
リアルタイムな情報とお問い合わせは **http://hijicho.com** または **http://twitter.com/hijicho/**

会いに来てくれるアイドル！
市大アイドル(仮) 新メンバーデビュー！

6月24日(月) 18時半、南部ストリートの西側にちょっとした人集りができていた。観客の視線を釘付けにしていたのは、4人の少女たち―そう、「市大アイドル(仮)」である。

ところで、市大アイドル(仮)って何？と思う方もいるだろう。

市大アイドル(仮)とは、その名の通り、市大で誕生したアイドルユニットである。ちなみに、読み仮名は「いちだい」アイドルである。「(仮)」にも重要な意味がある。

事の始めは、現メンバーでもあるあわねにゃんちゅう、かなえにゃんちゅうの2人が、2010年9月に「市大アイドルユニット　にゃんちゅう」を結成したところに遡る。「にゃんちゅう」として、イベント出演や学園祭でのライブを重ねてきた。

そして昨年、「市大アイドル(仮)」計画が発足した。市大にアイドルユニットを誕生させ、市大を盛り上げようという、まさに一大プロジェクトである。条件は、市大生の女子、アイドルが好きな人、歌・ダンスが好きな人、そして何より、市大を盛り上げたい人。こうして積極的にメンバー募集を行ってきた。ユニット名については、メンバーが5人に到達した時点で正式に付ける予定だという。

写真＝ライブ中の様子

今回のライブの目的は、待望の新メンバーのお披露目だった。

今回新しくメンバーに加わったのは、あずきにゃんちゅう、ひろみにゃんちゅうの2人だ。もともとアイドルのダンスをカバーするのが好きだったというあずきにゃんちゅう。自分に合うサークルを探していて、たまたま紹介されたのが、市大アイドル(仮)だった。「これは運命だ！」と感じ、即加入することを決めたという。本番中は少々こわばった表情だったが、本番後には「緊張しいなので、始まる前は緊張で死にそうでした(笑)。でもやってみたら、楽しかったです！」と溢れる笑顔で語ってくれた。

ひろみにゃんちゅうは、アイドル好きではあったものの、踊ることは眼中になかったという。しかし、ふたば祭で市大アイドル(仮)のライブを見て、とても感動し、自分もメンバーになることを決意した。初めてのステージとは思えないほど堂々としていたひろみにゃんちゅうは、「本番は楽しかったに尽きます！緊張はしなかったです！」と語っていた。

写真＝新メンバーのひろみにゃんちゅう(左)、あずきにゃんちゅう

そして、今回「市大アイドル(仮)」のリーダーとなることが正式に発表されたあわねにゃんちゅう。新メンバーについて聞くと、「あずきにゃんちゅうはとてもしっかりしていて、隣で踊っていても安心感がありますね。一方、ひろみにゃんちゅうは全部持っていくキャラですね(笑)。要注意人物です。2人はいいコンビだと思います！」と言う。

また、衝撃の引退宣言をしたかなえにゃんちゅうは、「今回のライブでは本当にたくさんの人に集まってもらえてよかったです。爆発力を持っている2人が入ってくれたので、安心して引退できます。今までは新メンバーに入ってほしいとか、ファンを増やしたいとかがむしゃらに動いていたのですが、心にゆとりができました！」と言う。新メンバーの2人に残す言葉は？との質問には、「あ！何も考えてなかった！保留で(笑)。」とかなえにゃんちゅう節を利かせてくれた。

市大アイドル(仮)の情報は、公式のTwitterやブログで確認することができる。また、ライブ前には彼女たち自らの手でビラなどを配布することもある。そう、彼女たちは、「会いに行けるアイドル」を超えた、「会いに来てくれるアイドル」なのである。ファンサービスも積極的で、曲の合間には観客席に飛び込んでハイタッチをしたりお菓子を配ったりなどの楽しい演出がある。サインや写真撮影のお願いなどにも気軽に応じてくれる。その親しみやすさも、ファンを虜にするのだろう。
今後の予定についてだが、銀杏祭でのライブは決定とのこと。それまでにも何らかの形でライブをやりたいと話していた。決定次第、SNSを通じて告知される予定だ。
一度ライブに足を運べば、彼女たちに魅了されること間違いなしだ。彼女たちの勢いからもう目が離せない。

長澤彩香(Hijicho)

関連リンク

- 市大アイドル公式Twitter (@ichidai_idol)
  https://twitter.com/ichidai_idol
- Youtube-市大アイドルチャンネル
  http://www.youtube.com/user/ichidaiidol?feature=watch
- 市大アイドル公式ブログ
  http://ameblo.jp/ichidai-idol/
- おもろい学生おりまっせ！～第1回◇あわねにゃんちゅう～
  http://hijicho.com/?p=9026

choっとカフェログ vol.6

夏カフェ～ハワイアンなくつろぎ空間 Peek a Boo

暑い夏。身も心ももうへとへと……こんな時こそおいしいものを食べて、落ち着いた空間でリフレッシュしましょう！ということで、今回カフェログではおいしく、楽しく、リフレッシュ！をテーマに夏に絶対行きたいカフェ、略して「夏カフェ」を紹介します。

写真＝ハワイアンポークリブ 900円

写真＝ハウピアマカダミア 750円

まるで時間の流れが止まってしまったかのような落ち着いた空間―ハワイアンな雰囲気が漂うお店Peek a Boo (ピーカーブー)。オーナーである万野さん夫妻はハワイが好きで、料理はもちろんお店の内装にもハワイに対するこだわりが溢れている。
ハワイといえばよくテレビで見る都会的なイメージを想像してしまうが、実際には昔の日本のような自然豊かなで人情味溢れる田舎もあるのだとか。万野さんはそういった田舎の面がお気に入りで、Peek a Boo を訪れた人には少しの間だけでもハワイののんびりとした空気を味わってほしいという。
メニューにはハワイを意識した料理が多く、今回は夏の新メニューの中から「ハワイアンポークリブ」と「ハウピアマカダミア」をいただいた。
ハワイアンポークリブはあっさりとした甘辛いタレが絶妙で、豚肉のくさみもなく非常に食べやすかった。見た目はボリューム満点だが、食べやすさを意識した味付けのおかげでペロリと平らげることができる。
デザートメニューにはやはりハワイの定番「パンケーキ」が多く、その中からハウピアマカダミアをいただいた。ハウピアとはココナッツミルクをベースにしてつくるクリームのことで、パンケーキ全体にかかっている白いクリームがそれにあたる。ココナッツミルクが程良い甘さで、マカダミアナッツがアクセントになっており最後の一口まで飽きることなくとてもおいしく食べられた。本場のハワイではもっと甘いらしいが、万野さんのこだわりであえて甘みをおさえ、ここでも食べやすさを意識しているとのこと。

新メニューの開発は友人を招いて試食をしてみて、おいしかったものを本格的に作りこんでいくという。また、今後の展望を聞くともっとハワイっぽさを出していきたいと笑顔で語ってくれた万野さん。ハワイへのこだわりが満載のPeek a Booであなたものんびりとした時間を過ごしてみてはどうだろうか？

松本慎也 (Hijicho)

Peek a Boo
住所：〒558-0014 大阪府大阪市住吉区我孫子5-12-1
ファンシェーブ2号館　1-B号
営業時間：11：00～20：00
(ランチタイム　11：30～15：00)
定休日：日曜日 (不定休 土曜日)
電話番号：06-4981-6487
アクセス：JR阪和線我孫子町駅　徒歩4分、
地下鉄御堂筋線あびこ駅3番出口より徒歩9分

QRコード＝地図

授業の枠を飛び出した、実践的な学びを
～キューズモールのイベントを自分たちの手で～

この夏、あべのマーケットパーク キューズモール (以下キューズモール) で行われるイベントに向けて、現在準備を進めている学生たちがいる。2つのイベントが、学生の手で行われる予定なのだ。現在プロジェクトの中心となって動いている商学部2回生の早川昂宏さんと、同じく商学部2回生の大谷学さんに、話を伺った。

写真＝早川さん(左)、大谷さん

―なぜ今回のイベントを企画することになったのですか？

早川：僕たちのイベントは、キューズモールの「あべのスマイルプロジェクト」というプロジェクトの一環で行います。これは、キューズモールさんが施設コンセプトとして掲げる「街は、おおらか。人は、ほがらか。」を実現するべく、地域と一体となって活性化を目指すためのプロジェクトなんです。その中で今回は地元の伝統産業に焦点を当てた企画を行うことになりました。

実は今回のイベントは、キャリアデザイン論という商学部の専門授業から発展して企画に至ったものなんです。この授業は、将来社会に出たときに役に立つ実践的な知識を早い段階から身につけることができる授業です。実際に企画を動かして、どうすれば他と差別化したり、客観的なデータからニーズを見つけたりできるかを実践的に学べるので、他の人より一歩リードして社会に出ることができます。

大谷：去年のキャリアデザイン論の授業ではキューズモールの運営元である東急不動産SCマネジメントなど3つの企業が関わり、それぞれで設定されたシチュエーションに合わせて企画の提案をしました。ここでは先に述べた比較力、分析力のほかに、プレゼン能力がないと勝てないんです。ビジネスの現場で求められることを、学生のうちに実際に勉強できる授業です。

授業で勝ったからといって企画を実現させるのはまた難しいんですが、今回は実現可能性を考えて、この2つのチームが選ばれました。2つの班が、それぞれ別の日程でイベントを行います。

―イベントの内容はどのようなものですか？

早川：現在大阪では、地元で採れた農産物や畜産物を「大阪産 (おおさかもん) 」としてブランド化し、地産地消を推進しようという取り組みが行われています。そこで、僕の班では、それを広めるための食育イベントをメインコンセプトとして考えました。

具体的には、キューズモール内にあるパティスリーラボツジ (Pâtisserie Labo. Tsuji) というケーキ屋さんとコラボして、親子参加型のお菓子作りイベントを行います。ここは辻製菓専門学校の学生が調理から接客までを行い、運営しているケーキ屋さんなんです。

お菓子と野菜という組み合わせは意外性があり、おもしろいのではないかという発想から、今回のイベントでは特に「大阪産」の野菜を含めた農産物をPRします。イベント名は「あべの　おやこらぼ」といい、ターゲットは小学校低学年の子どもがいる親子に絞っています。小さい子は、おいしいと思ったら成長しても食べ続けてくれるので、まず子どもに「おいしい」という意識を持ってもらい、親にも買ってもらうことをねらっています。

しかし、ただお菓子を食べてもらうだけではイベントにはなりません。実際に見て、作って、食べることで、「大阪産」に対する愛着が湧き、印象にも残ります。

大谷：続いてこちらの企画を説明する前に…南大阪の伝統産業を知っていますか？僕の班は、河内木綿という伝統産業をPRします。

河内木綿は、江戸時代から明治初期までは多くの庶民が実生活の中で使っていた製品なのですが、明治時代に外国産の木綿が入ってきたことや習慣の変化などがあいまって、戦前には衰退してしまったんです。しかし、国産の木綿製品には、生地の分厚さや丈夫さ、独特の風合い、紋様など、輸入物にはないよいところがたくさんあります。

僕たちは、南大阪が誇る伝統産業が廃れてよいのか？と感じ、今回の企画を打ち出したんです。実際に企画を実行するにあたり、NPO法人河内木綿藍染保存会、全国コットンサミットなどから協力を頂けることになりました。イベントで使う木綿を無料で譲ってもらえることになったんですよ。

当日はPRイベント、ワークショップイベントの両方を行う予定です。PRでは、国産木綿を使っている風景、着ている風景を写真に撮って、パネルを制作し展示する予定です。そしてワークショップでは、河内木綿の良さを、子どもたちも含め、皆さんに体験してもらいたいです。夏祭りに来てくれたお客さんが立ち寄り、説明を聞き、体験するのが目的なので、予約も費用も不要です。

また、今回は、大阪芸術大学の学生も協力してくれます。枠にとらわれない、「学生でしかできないこと」を企画に盛り込んでいくつもりです。堅苦しく伝統を語るだけではなく、学生のアイデア、制作物で大阪の伝統産業を人々に知ってほしいと思っています。

写真＝河内木綿の手拭い

―現在は、どのような体制で企画を進めているのですか？
早川：授業では6人グループでしたが、今やっているのは完全に有志という形なので、1人が入れ替わり、6人体制で進めています。6人のうち3人はイベント担当として、当日の内容詳細の決定にあたります。2人は広報担当として、広報物のデザインをしたり、プレスリリースを発行したりします。僕はリーダーとして、スケジュール管理やJAさんとのやりとり、外部との渉外を担っています。

大谷：こちらの班は、市大のメンバーは6人ですが、他大学のメンバーも合わせると10人以上になります。僕の班は、広報はキューズモールの夏祭りの広報と合わせて電通さん (株式会社電通) にお任せしているので、その他の仕事を分担しています。全員がそれぞれの役割を担って動いていますね。ただ、外部の連携先との齟齬があってはいけないので、渉外はリーダーがやるようにしています。
　これまでの企画会議はスカイプやラインで行ってきました。すでに予算と企画の詳細も決定し、今月末には芸大との顔合わせもあります。いよいよ、実際に必要なものを揃えたり、協力先との打ち合わせを進めたりと、考える作業から実動に移行していく段階です。

―イベントの企画にあたって、苦労した点はありますか？
早川：現在は、毎週月曜日に辻調さん (辻製菓専門学校側) とのミーティングを行っています。辻調さんは、お菓子に対するこだわりがものすごくあるんです。でもこちらは、そういった知識やこだわりがないし、思い入れもない。もともとの価値観の違いから意見が噛み合わないことも多いですが、ぶつかりながら落とし込んでいっています。

大谷：あとは、企画書が通らないことですね…授業では「こんなことがやりたい」という夢を語るだけでよかったのですが、実際にイベントを作るとなると、思い通りにはいかなくて。しかも二人とも意固地で、やりたいことを譲らない性格なので(笑)。出しては突き返される、の繰り返しです。

早川：企画書を戻されると、やってきたことを全否定される気持ちになりますね。

大谷：精神的に打ちのめされます。でも、こちらもグループメンバーや提携先の思いを背負っているので、簡単に譲ることはできない。企画書作りは一番苦労する点ですが、一番やりがいがあって楽しい点でもあります。
早川：キャリアデザイン論の担当でもある、商学部の非常勤講師である石川靖之 (いしかわ やすし) 先生に、企画書を見てもらっています。企画書について怒られるのですが、その後にアドバイスもくれるので、励みになります。先生も、授業ではなく、イベントを作る側として関わってくださっているので、こちらも完璧なものを書いてやろうという気持ちになる。ちなみに、先生自身も経営者なんですよ。

―来場者にどのようなことを伝えたいですか？
早川：こちらのイベントでは、「大阪産」に触れてもらい、実際に肌で感じてもらいたいというのが一番にあります。また、子どもが作ったお菓子を親子で食べてもらうことで、「おおさかもん」を通じて、親子の絆を深めてもらいたいです。

大谷：伝統産業はどうしても、「古臭い」「堅苦しい」「小難しい」といったイメージがあるので、もっと身近に感じてもらう必要があります。生活にありふれていた“ジャパンブルーの親しみ”を今の人にも感じてほしい。だから、今の価値観を携えている学生でPRしていきたいです。木綿製品がどのように人々の生活の中に存在していたのかを子供、若い人、上の世代にも知ってもらい、最終的には皆が「南大阪といえば河内木綿！」と答えるくらいになってほしいですね(笑)。

―最後に、イベントにかける思いを教えてください。
早川：成功させてやろうという気持ちは2人ともあります。

大谷：僕は、「学生のうちにしかできないこと」という考え方が嫌いです。なんだそれって。それよりも「学生だからこそできること」を追求したい。会社同士だと、企業カラー、イメージ、縛り、金銭的問題などにとらわれてしまうけれど、学生だから外部と簡単に連携できるし協力してもらえる部分もある。それで、来てくれたお客さんが楽しく、自分たちも楽しい企画が出来れば、それでいいと思うんです。学生にしかできない楽しさをつくっていきたい。大人を笑ってやるような企画がしたいです。
　キャリアデザイン論の講義の中でも教わったんですが、キャリアデザインとは、「人生設計、人生のありかたをデザインすること」です。おもしろくない人生なんて嫌でしょ？嫌いな仕事は一生の仕事にはできないから、どうやったら人生を楽しくできるか考える必要があるんです。今回のイベントも、とにかく楽しいものにすることがメンバーの目標ですね。

早川：実は、授業から実際の企画に移るときに、メンバーが結構抜けると思っていました。でも、みんな自分たちの考えた企画をやり遂げたいと言ってくれたのが、とても嬉しかった。僕は最初、指名して仕事を振ることが苦手だったのですが、メンバーのことを信頼して仕事を振れるようにもなりました。学生だからこそ、周りの援助があって、企画が出来ると思います。僕個人としては、班のメンバーと一緒に最後までこの企画をやり遂げて喜びを分かち合うのが、今回のイベントの抱負ですね。

大谷：とにかくおもろいことがしたい。

早川：おもしろくなかったらやってないです。

長澤彩香 (Hijicho)

From Editor

2人とも、それぞれが担当するイベントについて、ビジョンを明快に語ってくれた。彼らは、特色ある市大商学部の授業、そしてそこから発展した現在のイベント企画を心から楽しんでいるようだった。

実践的な授業は、ただ教授の話を一方的に聞く授業とは違い、それなりの時間と労力を割かねばならない。それが選択授業であれば、敬遠してしまう人もいるかもしれない。しかし、その授業に真摯に取り組んだ結果が認められ、大きなイベントを自分たちの手で今まさに作り上げようとしているのが、彼らなのだ。

与えられた機会を勉強の場として捉え、自らの成長の糧として存分に活用する姿勢、そして何より自分たちが楽しんで取り組む姿勢を持ち続けることで、大学生活をより有意義なものにできるのではないか。2人の言葉を聞いて、そんなことを考えさせられた。

また当日の様子なども、追って報告する予定である。
イベントの成功を祈っている。

開催概要

●「あべのおやこらぼ」
日時：8月11日(日) 10:30〜12:00 / 14:00〜15:30
場所：あべのキューズモール3階 Pâtisserie Labo. Tsuji 内 (スカイコート前)
参加料：1500円
参加資格：親子 (子供1人、大人1人)
問い合わせ先：未定 (決定次第掲載)
※要予約、6/25より募集開始

●キューズモール夏祭り「綿繰り体験と藍染くるみぼたん作り(仮称)」
日時：8/17(土)、18(日)
場所：あべのキューズモール3Fスカイコート
※小雨決行
詳細はあべのキューズモールに従う

おトイレミシュラン☆　第2弾　〜1号館地区編〜

おトイレミシュラン☆とは・・・

トイレとは毎日誰もが使っている場所であり、生活の一部であるとともに、安らぎの場でもある。市大生がより快適なトイレライフを過ごせるよう、Hijichoが独自に大学内のトイレ事情についての分析を行い、快適なトイレについて探求そして調査を行ない大学内にある理想的なトイレについて読者にランキング形式で紹介するコーナーである。

快適なトイレとは

一言に快適なトイレといわれても、それぞれが理想とするトイレのあり方は各々で異なるだろう。そこで、我々は快適なトイレに欠かすことのできないであろう５つのポイントを考え出した。

その5つのポイントとは
1.清潔であること
2.設備が充実していること
3.利便性がよいこと
4.静かであること
5.広いこと

今回のおトイレミシュラン☆では、上記の５つのポイントを評価の指標として用いて、それぞれのトイレについて分析、評価を行った。

評価方法の仕方

今回は上記の５つの指標を用いて、加点方式で採点を行っていく。

1.清潔度 (15点満点)
〇チェックポイント
・トイレが清潔な状態を保っているか
・においはないか
・便器便座は清潔か
・床は清潔か
・洗面台周辺は水で濡れていないか

2.設備の充実度 (15点満点)
〇チェックポイント
・トイレ内の設備の新しさ
・洗面台などの自動化
・ウォシュレットなどの施設の充実さ
・トイレットペーパーがきちんと補充しているか
・ゴミ箱などが設置してあるか
・石鹸が洗面台に十分に補充しているか

３.利便性 (10点満点)
〇チェックポイント
・場所のわかりやすさ
・エントランスや教室などからアクセスしやすいか
・外からのアクセスも考えて低層階にあるか

４.閑静さ (10点満点)
〇チェックポイント
・利用者が多すぎないか
・落ち着ける空間であるか
・トイレ周辺の環境

５.広さ (10点満点)
〇チェックポイント
・トイレの規模、数
・個室の広さ
・洗面台の数、広さ

の合計６０点満点で評価する。

調査範囲

今回の調査範囲は1号館、法学部棟、南食堂、サポートセンター、田中記念館、更衣室の1号館地区にあり、かつ学部にかかわらず学生がよく使う計13か所のトイレについて調査を行った。

★による評価について

今回の調査ではおトイレミシュラン☆と銘打ってあるように、本家ミシュランガイドと同様、星印★を用いて評価を行う。

星の数には次のような意味を持つ。

★　(1つ星) − 快適に用を足せるトイレ
★★ (2つ星) − 極めて快適であり、近くに別のトイレがあったとしても、遠回りしてでも行く価値のあるトイレ
★★★ (3つ星) − そのトイレに行くために杉本町駅からわざわざ大学へ戻りたくなるほど価値のある卓越して快適なトイレ

なお星の数は以下のように評価の点数で決まる。

32点−35点　★
36点−39点　★★
40点−　★★★

トイレにうるさいHijichoトイレ調査員も納得の星付きトイレ一覧

★★★ (3つ星)

40点–

・高原記念館 (男子トイレ) 42点
・高原記念館 (女子トイレ) 41点

※参考記録
　1号館地区における3つ星トイレは2か所、ともに高原記念館のトイレである。高原記念館自体が新しく、また外部の方が多く使うことを配慮して作られているようで、個室にはウォシュレット完備。これまでに調査した市大内のトイレで個室にウォシュレットが完備されているのは、ここと学術総合センター1Fのトイレだけである。このトイレは人通りの多い通りの裏で人の目にも付きにくいため、利用者も少なく男女ともにきわめて清潔な状態であった。
　ただし、このトイレは入口 (なぜか男子トイレの入り口のみ) に関係者以外の利用を禁じる旨の張り紙がしてあった。この張り紙の指す「関係者」とは学生を含めた市大関係者を指すのか、はたまた職員や来客のみを指しているのかは不明だが、緊急時以外はこのトイレを積極的に使用しないほうが良いのかもしれない。今回のおトイレミシュラン☆では参考記録として紹介する。

★★ (2つ星)

36点–39点

・サポートセンター1F (学情側) 38点
・1号館3F (南食堂側) (女子トイレ) 38点
・法学部棟2F (女子トイレ) 38点
・法学部棟2F (男子トイレ) 37点
・1号館2F (南食堂側) (女子トイレ) 37点
・1号館1F (法学部棟側) (女子トイレ) 37点
・1号館2F (法学部棟側) (男子トイレ) 36点

　2つ星は男女合わせて7か所のトイレがランクインした。トイレの改修がなされ、設備が新しくなった1号館から多くランクインしていることがわかる。38点を獲得したサポートセンター1Fの学情側にあるトイレは、見つけにくい場所に立地しているせいか、利用者も少なく、また設備もほかの場所のトイレと比べてかなり新しく、まさに1号館地区のトイレにおける穴場的スポットである。しかし、男子トイレは38点という高得点を獲得したものの、女子トイレは30点と振るわなかった。清潔さが男子トイレと比べて劣っていたようだ。
　もうひとつ注目すべき点は男女ともに2つ星にランクイ　ンしている法学部棟2Fのトイレである。
　法学部棟の3F、4Fの大教室 (740,730) は文系学部の講義でよく使われているが、2Fは素通りするだけの学生が多いのではないだろうか。法学部棟2Fは法学部の事務室があるのみであり、3F・4Fと比べひっそりとしており良好な環境が保たれている。必然的にトイレの利用者も少なく、3F・4Fと比較して、清潔で快適なトイレ環境が保たれているというわけである。

★　(1つ星)

32点–35点
・1号館1F (南食堂側) (女子トイレ) 35点
・1号館2F (法学部棟側) (女子トイレ) 34点
・1号館2F (法学部棟側) (男子トイレ) 33点
・1号館2F (南食堂側) (男子トイレ) 32点
・法学部棟3F (女子トイレ) 32点

　1つ星は5か所のトイレがランクイン。2つ星に続き1号館が圧倒的な強さを見せ、5か所中4か所を占めた。1号館のトイレの男女合わせて12か所中8か所が星付きの優良トイレという結果になった。1号館のトイレの傾向としては男子トイレは法学部棟側のトイレのほうが評価が高く、女子トイレは南食堂側は高層階、法学部棟側は低層階のほうがより清潔で評価が高い傾向がある。
　もっと詳しく各トイレの評価、概要を知りたい方はこちら。個室、洗面台の数、バリアフリー施設などの各トイレの設備についての情報を載せています。

町田和紀 (Hijicho)

おトイレミシュラン☆トイレデータ完全網羅版 ～1号館地区編～　男子トイレver

おトイレミシュラン☆トイレデータ完全網羅版 ～1号館地区編～　女子トイレver

From Editor

　前回の旧教養地区のトイレ調査と今回の1号館側のトイレ調査を通して、市大のトイレ事情についてかなり詳しく分析、そして知ることができたように思える。
　普段何気なく使っているだけで注目されることが少ない市大のトイレ事情について、少しでもクローズアップされ、より良いトイレ環境を追及、実現することで誰もが心地よくトイレを利用することができればと筆者は願う。このおトイレミシュラン☆はあくまでも1つの参考に過ぎないが、多くの学生が市大でより快適なキャンパス・トイレライフを送るための手助けになれば幸いである。

※注意※
おトイレミシュラン☆での評価はあくまでもHijichoトイレ調査員の個人的評価であるのであしからず。

コラム日本vol.4 日本国憲法と大学の自治、そして市大 ～変革期の市大生～

憲法上、大学の自治において、学生はその主体たる資格をもつのか、については過去に様々な議論が重ねられていた。本記事では、その経緯を見ていくとともに、府市大統合問題を関連づけて、現在市大生は大学の自治に関してどのような立場に置かれているのか、持論を展開していきたい。

前編：日本国憲法と大学自治

学問の自由と大学の自治

日本国憲法第23条は、学問の自由を保障する旨を明示にて規定している。学問の自由とは、個人の真理の探究を、国家が圧迫・干渉したときにこれを排除することができる権利であり、この内容について、通説では研究の自由、研究発表の自由、教授の自由を指すとされる。現行憲法に大学の自治に関する明文の規定はない。しかし、大学の自治は、憲法23条の保障する学問の自由のために必要な制度として理解されてきている。

大学の自治とは、大学が、政治的な統制や行政的な干渉、社会的な圧力を排して、研究･教育にかかわる自律的な権限をもつことだ。大学の自治権の内容には、(1)教員の人事に関する推薦･選任･免職等の諸権限、(2)学長･学部長等内部管理者の選任権、(3)学則･内規等内部規程の制定権、(4)教育課程･カリキュラムの編成権、(5)学位取得資格の認定権と授与権、(6)施設の管理権、(7)入学者の選定権、卒業認定権などがある。

学生は大学自治の主体か？

大学の自治の主たる担い手は教授その他の研究者であるが、学生も自治の主体となるかどうかについては議論がある。

伝統的な大学自治の考え方によれば、自治の担い手は教授その他の研究者の組織とされ、学生はもっぱら営造物 (公共のために用いる施設) の利用者として捉えられた。ポポロ事件最高裁判決は、学問の自由と自治の主体を「教授その他の研究者」とし、「大学の施設と学生は、これらの (教授その他の研究者の) 自由と自治の効果として、施設が大学当局によって自治的に管理され、学生も学問の自由と施設の利用を認められるのである」と判時して、いわゆる学生＝営造物利用者説をとっている。

この見解に対しては、「営造物利用者説の誤りは、大学を他の文化的営造物、たとえば、美術館、博物館、図書館等と同視したところにある。」とし、「大学には、他の営造物と異なり、研究と教育の場としての特殊性が認められ」、学生は「教員から学ぶとともに教員に学問的示唆を供する」存在であり、その「精神と精神の交渉過程こそが大学の特色」である、という批判もある (有倉遼吉,『憲法秩序の保障』,1969年・日本評論社,166頁)。

その後、東大紛争を契機に、学生も大学自治の担い手であるべきだという議論が強くなり、ポポロ事件判決の採った伝統的な理論を見直す意見が学説上も有力になってきた。ただ、学生は教授その他の研究者とはその地位と役割も異なる。この点について、東北大学事件控訴審判決 (仙台高判昭和46年5月28日 判時645号55頁) が、「学生は、大学における不可欠の構成員として、学問を学び、教育を受けるものとして、その学園の環境や条件の保持およびその改変に重大な利害関係を有する以上、大学自治の運営について要望し、批判し、あるいは反対する当然の権利を有し、教員団においても、十分これに耳を傾けるべき責務を負うものと解せられる」と判示している。

もっとも、この肯定説によるとしても、学生が大学の管理運営にどこまで参加しうるかについて、一般論として論じることはできない。学生の参加がどのような形で具体化されるかは、各大学が法律の定めるところにしたがって、自主的に決定すべきことがらであろう。

注釈

・ポポロ事件

ポポロ事件とは、東京大学の公認学生団体「ポポロ劇団」が、1952年2月20日に、演劇発表会を行なった際に、学生が会場にいた私服警官に暴行を加えた事件。上演中に、観客の中に私服警官4名がいるのを学生が発見し、身柄を拘束して警察手帳を奪い、謝罪文を書かせた。その際に学生らが暴行を加えたとして起訴された。

後編：市大における学生自治

日本国憲法における大学の自治と学生の関係を見た上で、現在の市大における学生の自治について考えてみよう。(以下、学生も「大学の自治」の主体であるという学説に立った上で、現在の市大について持論を展開していく。)

今までの市大生

「学生は大学自治の主体であり、大学の自治への学生の参加がどのような形で具体化されるかは、法律の範囲内で各大学が自主的に定めるところに委ねられる」という学説に立つならば、現状、市大においては、学生の参加が具体化されていない面もあるのではないだろうか。実際、過去には自転車有料登録制や保護者への成績通知制度などで、問題意識から声を上げている学生もいた。しかし、大学による説明会や大学と学生との話し合いの場が開かれることはなかった。

それと同時に、学生自身が望まなければ、大学側から自発的な説明をするとは思えない。Hijichoでは、これらの問題に対し、学生同士の連携不足や「学生の総意」の不在を指摘し、「市大生は市大の問題に対し、もっと深く取り組んでいいと思う。市大をよりよい大学にするのは、市大生に他ならないのだから。」と主張を行なっている (吉田寮食堂問題から見る市大 http://hijicho.com/?p=6726) 。

つまり、現状本学において「学生の参加がどのような形で具体化されるか」は明確にされていない面もある。また、学生自身も「大学自治の主体」たる自覚が必要ということだ。

変革期の市大生

次に、これからの市大を見ていこう。現在の市大生は、大学の統合という「変革期」に置かれていると言っていい (はたして実現するかどうかは定かではないが) 。もしも新大学が実現するのなら、学生の参加がどのような形で具体化されるかは、新大学が自主的に定めることになる。

実際、「新大学ビジョン(案)」においても、「学生生活を把握するとともに、学生の意見を反映する仕組みを構築し、教育環境の改善に努める。」という文言がある (「新大学ビジョン(案)」 3 理念実現に向けた戦略 (2)教育戦略 より) 。しかしながら「学生の意見を反映する仕組み」というのも、具体的にどのようか形で実現されるかは明らかではない。また、同ビジョンにおいて、サークル・部活などの課外活動ついては一切言及されていない。 (詳しくは、市大存亡の危機　～無関心ではいられない～ URL：http://hijicho.com/?p=12914) 。

現状「学生からの意見を反映する仕組み」が具体化されていないことが、諸制度の導入に際し、大学からの一方的な通知にとどまってしまうという問題を引き起こしている一因である。だからこそ、新大学が実現する際には、「学生からの意見を反映する仕組み」が、しっかりと具体化されることを希望する。

そして、「学生の意見を反映する仕組み」作りにこそ、学生の意見を反映していく必要があるのではないだろうか。仕組みは一方的に与えられるものよりも、双方の意見が反映されたものの方が、よりよいものになるはずだ。そのためには今後、統合後の大学の自治に関する仕組みや規定を、大学と学生が一緒になって作り上げられるような場が必要だろう。それと同時に、統合によって四者連絡協議会 (以下、四者協) が存続できるのか不明瞭だ。四者協が解体された場合、加盟団体の活動が保障されないのはもちろんだが、四者協のみが有している大学との折衝権が失われることも大きな問題だ。大学運営に学生の声を届ける術を失うことが危惧されるからだ (市大存亡の危機　～無関心ではいられない～ http://hijicho.com/?p=12914 より) 。

つまり我々学生は、大学自治の主体たる新大学における「学生の自治」に対して、明らかになっていない部分を明らかにし、仕組みに反映していくこと、そして現在四者協が有している折衝権など守るべきものを守っていくことが必要だ。そのためには、統合問題に当事者意識を持ち、学生間で連携して声を上げていく必要がある。

新しい大学に、学生がどう関わっていくのか。それは未来の統一された大学の学生の問題ではなく、我々が担うべき問題でもあるのだ。だからこそ、今の市大生も府市大統合に「無関心ではいられない」。

鶴木貴詩 (Hijicho)

参考文献

・野中俊彦、中村睦男、高橋和之、高見勝利,『憲法Ⅰ (第4版) 』,2006年3月30日,有斐閣
・芦部信喜,『憲法学Ⅲ 人権各論(1) 増補版』,2000年12月30日,有斐閣

住吉・住之江・西成3区役所と市大の連携協定調印式

2013年6月24日 (月) に住吉区役所、住之江区役所、西成区役所と大阪市立大学による連携協定の調印式及び公開討論会が行われた。3区役所と市大は、これまでも都市防災研究や教育・学術に関わる様々な取り組みを進めてきた。そして今後、連携をより一層高め、各区の活力ある地域づくりと大学の教育・学術研究機能をさらに高めることを目的として、今回の連携協定を結ぶに至った。

写真＝連携協定調印式の様子 (橋本写す)

公開討論会「地域防災の取り組み・課題と大学の役割」

今回の協定締結を記念し、市大の都市防災研究グループと各区長による公開討論会も開かれた。討論会では、各区長が各々の区で展開している防災に対する取り組みや、市大との協定締結後の構想・取り組みについて意見を展開した。

住之江区長の高橋英樹氏は、災害に強いまちづくりをかかげ、そのために豊かなコミュニティを築くことや、防災マップの作成、中学校への出張講座などの政策を発表した。例えば中学校への出張講座は、南港などでは昼間大人がほとんどおらず、その際に中学生の力が必要になることも考えて行われている。また、タクシー無線を活用して、災害情報を提供するシステムも考案されている。最近ではDIOS (Disaster Information & Operation System) という、クラウドを活用したシステムも発明されており、災害対策に大きく貢献すると考えられる。

市大との連携については、市大が①知的支援、②学生ボランティアの派遣、③避難場所の提供などを行うのに対し、住之江区としては①学生の社会的体験・自己実現の場の提供、②研究フィールドの提供、③災害情報の提供などを行うことができるとしている。

住吉区長の吉田康人氏は、住民の代表者から成る住吉区区政会議や防災部会を開催し、そこに市大の教員を招いている。市大との連携としては他に、地域防災フォーラム「いのちを守る都市づくり」なども共催している。

その他の政策として、福祉避難所 (協定締結施設数は24区中トップ) の設置や、電柱240本に注意喚起の掲示をしたり、一時避難所を26カ所設置したりしている。

西成区長の臣永正廣氏は、西成区の世帯数が多いことや木造建築が多いこと、また家々の間が狭いことといった特徴から、地震による火災に備えた対策をとっていると語った。それは地域住民同士のつながりをつくることである。少子高齢化が進む中で、高齢者で単身の世帯が増えている。そのような単身世帯が逃げ遅れたりすることのないよう、地域住民同士のつながりが大切になるというわけである。

大切なことは、地域住民同士のつながり

臣永区長が語った地域住民同士のつながりは3区の区長全員が口をそろえて主張していた。どれだけ防災環境が整備されても、それを扱えなくては意味が無いし、地域の方々との協力は不可欠だろう。また、高橋区長によれば、例えば新興住宅に入ってきた住民と、もともとその地域に住んでいた人々とのつながりを作ることは難しいという。さらに、そういった新興住宅ではその住宅の人々同士での間のつながりを作ることも難しいそうだ。

しかし高橋区長も臣永区長もそんなに難しく考える必要は無いとも語った。例えばお花見や地域の運動会など、楽しみながら人々がつながる場を提供できればいいという。そうして楽しむ中でつながりが生まれ、それが災害の際にも活きてくるのではないかということだ。

皆さんは近所の方のことをどれくらい知っているだろうか。災害が起こった際にお互いに助け合えるような関係を築けているだろうか。今一度自分の地域の方々とのつながりを確かめてはいかがだろうか。

橋本啓佑 (Hijicho)

飛辞書

「善意」と「悪意」

「飛辞書 〜文理を越えるその言葉〜」は、あなたの学科だけで使われているような特殊な言葉を取り上げ、分かりやすく説明していくコーナーである。「特定の学問分野だけで使われている言葉が、その分野を飛び越え、みなさんの知識になる」をコンセプトにしている。第五回目の今回は法律分野で使われる際の「善意」と「悪意」という言葉について取り上げる。

善意と悪意とは

一般的に善意は「良い心・親切心」、対の悪意は「相手に害を加えようとする心」という意味で使われる。しかし法律用語として使用するときは「法律上の効力に影響を及ぼす事柄について知っているか、知らないか」ということを意味する。主に民法で使用される用語で、何も知らず契約を結んだ人の権利を法的に保護するためにある。その契約に問題があると知らず、「やって良いこと」という意志があっての行為であると「善意」といわれる。逆に問題があると知っていて、「やって悪いこと」という意志がある上での行為は「悪意」になる。

「善意と悪意」の使用例

「善意と悪意」の具体的な使い方を説明していきたい。

たとえばあなたにA,Bという友達がいたとする。Aは持っていたマンガ一式をBに譲り、譲ってもらったマンガをBがあなたに売った。この場合あなたはこのマンガの現在の持ち主となり、このときABの売買に関してあなたは第三者となる。

しかし、実はAは親にマンガの買いすぎについて叱られ古本屋に売りなさいと命令されたので、それを免れるためにBに相談し、「実際は俺のだけどとりあえず建前上Bのものにして家に置いてくれよ」と頼んでいたとする。けれどBは約束を破りそれを勝手にあなたに売っていた。

この時ABの契約は嘘のものであったので、Aのマンガはあなたのものままだ。Bは謝罪しAにマンガを返さなければならない。そうなると当然何も知らないあなたも、自分に関係ない理由のせいでお金を出して買ったマンガを返すことになる。

しかし本当に返さなければいけないのだろうか。そこで重要になるのが「善意と悪意」である。

あなたがもしAB間のやりとりや真意を知らなかった場合、あなたは「善意」の第三者となる。そして善意の人間が理不尽な理由で権利を侵害されることは法律により禁じられている。

そのため何も知らない「善意」のあなたには法的な保護が働き、Aのマンガをそのまま手に入れることが出来るのだ。

けれどもしあなたがAのマンガをBが無断で勝手に売ったと知っていた「悪意」の第三者ならば、Aはあなたからマンガを取り返すことが出来る。

法律は理不尽な結果を生まないよう当事者の状況によって柔軟な判断を下すことが求められるが、その根拠として「善意」「悪意」という区分けがなされることがあるのだ。

終わりに

「善意と悪意」は日常生活で使われる用法と法律用語として使われる用法では意味が異なる。法律用語としての意味を知っている法学部外の生徒は少ないだろう。この通り、世の中には自分が知らない言葉や、自分の知る意味とは違う意味が定義付けられている言葉が溢れている。もしかしたら気づいていないだけで、あなた自身が今までに法律用語の「善意と悪意」が使われる場面に遭遇していたかもしれない。

特定の学問分野だけで使われている言葉を知ることは、一見意味が無いように見えてもその後どこで役に立つかわからないものだ。何より知識はいくら身につけても重荷にならない。この機会を生かして自分の周りにある言葉を改めて調べてみれば、今まで曖昧な印象で使っていた言葉の正しい意味や新たな発見があるかもしれない。その経験はあなたの人生をより知的にするだろう。

細原千尋 (Hijicho)

市大七不思議 ~ The 7 Wonders of OCU ~ 第一回

「学校の七不思議」という言葉、これまでの学生生活を通じて皆さんも一度は聞いたことがあるだろう。およそ学校と呼ばれるところには多くの場合七不思議が存在する。古い学校は特に多く、その内容は単なる噂の場合もあれば、それぞれの学校の特徴や歴史を実にうまく捉えているものもある。

そこで今回130年余の歴史を持つ我らが大阪市立大学にも七不思議は存在するのではないか、そしてそれを通じて市大の今まで気づかなかった部分を再発見していけるのではないかという想いのもと調査を開始することにした。

一号館の地下室

記念すべき一つ目の七不思議候補はここである。まずはこちらの写真をご覧いただきたい。

写真＝一号館の地下室 (古迫写す)

この場所は一号館1階、正面から入って左側に進むと見つけることができる。普段から人が立ち入っている気配はなく、急な階段を下りると暗闇に包まれた古めかしい扉がいかにもな雰囲気を醸し出している。実際に幽霊が出るという噂も存在しているようだ。

調査を進めたところ、この場所は現在は経営管理課の管轄下で書庫として利用されているということで、内部には重要な書類や資料が保管されているため学生が入ることはできない。

そのため幽霊が実際にいるかどうかは検証できなかったが、この噂は戦後市大の杉本キャンパスが米軍に接収*されていた際、病院として利用されており、特に朝鮮戦争のとき一号館が遺体安置所として使われていたという歴史に基づくものであるようだ。

大阪市立大学が経験した戦争の記憶をひっそりと伝えている、そんな場所なのかも知れない。

さて、一つ目の七不思議はいかがだっただろうか。このように市大には不思議な場所や噂がまだまだ存在するはずである。そんな不思議の数々を皆さんとともに見つけていくことができれば幸いである。ぜひ皆さんが知っている市大七不思議のお話、お聞かせ願いたい。

古迫肇 (Hijicho)

*国等の権力機関が個人の所有物を強制的に取り上げること。

参考文献

『大阪市立大学の歴史 – 1880年から現在へ -』
大阪市立大学史資料室 2011年

●市大七不思議大募集

連載コーナー「市大七不思議」は読者から寄せられた応募に基づきHijichoが直ちに優秀な記者を派遣し真相の追求にあたります。
Hijichoでは市大の七不思議候補を募集しています。
皆さんが知っている市大にまつわる不思議な話がありましたらぜひ我々にご一報を！

○応募資格
大阪市立大学または大学院に在学中の学生・市大OB・教職員など市大関係者

○応募先
hijicho@gmail.com まで件名に『市大七不思議候補』と明記し、必要事項 （ 推薦理由、わかる限りの情報：噂でも可 ）を明記の上 ご連絡ください。
※応募していただいたすべての候補を取り上げるわけではありません。応募された候補の中から市大七不思議にふさわしいものを厳選したうえで取材させていただきますのでご了承ください。取材を行う人が決定した際にはこちらから連絡させていただき、取材にご同行をお願いする場合がございます。その際はご協力お願いいたします。